



Title	多能、多趣味の秀才
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 2026, 65, p. 104-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

多能、多趣味の秀才

柏木 隆雄

井元秀剛先生が今年度で定年退職される。月並みな表現でお恥ずかしいが、容姿風采ともに、阪大に來られてから、ほとんど「青年そのもの」といった感じで接してきた私は、しみじみ自分の老いを感じてしまう。これで私が現役の時に同僚だった先生方のすべてが退職されるわけで、感慨なしとしない。

井元先生（以下さん、づけでお許し願う）が阪大言語文化部に講師として赴任されたのは1993年。東大の博士課程を終えてすぐの着任で、仏語学の新しいスターと聞いていたのが、最初にお会いした時は本当に青年、というか「若者」といった感じで、あとから考えるとすでに井元さんは30歳を越えておられたはずだけれど、当時50歳の私は大いに老人ぶって、胸を反り返して挨拶したように思う。井元さんは関東の人に多い照れ屋さんで挙措謙遜、それでいていつもにこやかに接してくださった。着任早々の頃に、わが家に遊びに来てもらっておしゃべりしたことも懐かしい。話しているとすごく気の良い人で、ぜひわが家で酒でも飲んで、ということになったのだが、井元さんはお酒を嗜まない。おしゃべりのおっさん相手にさぞ窮屈だったと思う。いや、最初の訪問は午後のことで、お茶を飲みながら独身の井元さんに私たち夫婦でお嫁さんを貰ったら、とか迫って、そんな話に終始したような気がする。今ならハラスメントで訴えられるところだ。

井元さんの仏語学上の業績は時制、話法、条件文、冠詞の問題など多岐に及んで、たしか井元さんを教えたという東大の先生から、彼は秀才だと高い評価をされ、阪大でもよろしく、と言われたことがある。仏語学、言語学に疎い私は、ひたすら感心して話を聞いたり、論文を読ませて頂くばかりで、その実半分も理解に及ぶことがない。しかし雑誌『ふらんす』での『中級フランス語 時制の謎を解く』の連載は、懇切に説く文体で、興深く読ませて頂いた。ガリアの研究会では積極的に質問などもされて会員の研究に真摯に向き合われ、快く会の役員も引き受けて下さるなど、感謝のほかない。

学究として超一流の井元さんは、きわめて多芸、多趣味。学生さんたちが手作りで開いてくださった私の還暦の祝宴で、見事な手妻を披露して驚かせ、書道でも一流を示す。私が大手前大学に勤務している頃、通勤途上の夙川駅の交差点で偶然すれ違った井元さんは、折しも囲碁の会の帰りだとのこと。おそらくチェスも得意なのではないか

退職の後も様々な面で活躍され、多能、多芸、多趣味の発展を期待したい。

（大阪大学名誉教授・大手前大学名誉教授）